

# 民俗学の方法としてのフィールドワーク<sup>訳注1)</sup>

## ——参与観察による文化分析——

ブリギッタ・シュミット-ラウバー

翻訳 及川 祥平 クリスチャン・ゲーラット

豪華なホテルのラウンジに  
あるいは簡易宿泊所の玄関に出向き、腰をおろしたまえ  
ゴールドコーストの高級ソファに腰掛け  
あるいはスラム街の救護所の板張りベッドで、寛いでみたまえ  
オーケストラホールや  
スター・アンド・ガーター劇場のパーレスクの客席にも  
腰掛けてみたまえ  
要するに、本当の研究によって君のズボンのお尻を汚すのだ<sup>訳注2)</sup>

ロバート・エズラ・パーク

### はじめに

フィールドワークは民俗学／ヨーロッパエスノロジー<sup>訳注3)</sup>の中心的な研究方法の一つであり、現代の日常文化や生活の文脈における文化的秩序、個人の実践に内的視点からアプローチする場合に用いられている。この言葉を、本稿では民俗学で時おりみられる「ゆるやかな」使用法とは異なる観点から記述する<sup>原注1)</sup>。というのも、「ゆるやかな」使用法のもとでは、時としてほとんどすべての相互的な社会調査、あるいは、経験的な収集活動そのものがフィールドワークとして記述されてしまうのである。つまり、厳密に言えば単なる質的インタビューの段階に過ぎないものや、研究者がその場に居合わせて何事かを見聞きしただけという場合でも、フィールドワークと称されることになる。このような曖昧きわまりない用法を、ここでは学術的なフィールドワーク概念と対置して

おきたい。すなわち、フィールドワークの特性とは、研究対象者が営む日常生活への積極的で観察的な参加に基づき、体験の共有による意味理解 (sinnverstehend) と、社会的現実の追体験を目的として行なわれる、多視点的かつ多方法的なアプローチという点にある。以下、民俗学にとってのフィールドワーク概念の意義を述べ、また、その民俗学的／民族学的特性を明らかにする。それに向けて、次節ではまず、概念の明確化と一般的な特徴を確認しておかねばならない ([Legewie 1995, Ziegler 2001] 参照)。

## 1、概念と特徴

「フィールドワーク」は、研究主体によって展望可能な程度の規模の社会的・文化的ユニットを対象とし、文化的・社会的データを現地で収集する微視的研究方法の複合である。そこには、多様なインタビューや観察<sup>原注2)</sup>、ネットワーク分析、あるいは人口統計学的データや系譜学的データの収集など、様々な質的・量的方法が含まれる [Russel 1995, ders. 1998, de Munck/Sobis 1998, Dewalt 2002, Beer 2003]。しかし、フィールドワークの特徴的方法は「参与観察」であり、しばしばフィールドワークそのものと同一視される。「参与観察」とは、研究者が、調査地<sup>原注3)</sup>の日常的社会生活に直接参加することである。そして、その場に参加しながらも、研究者は分析のために、対象との間になんらかの距離を確保することになるが、そのような距離に基づきながらも、エンパシク (感情移入的) で、追体験的な理解をするのが「参与観察」である。

方法論的論文においては、参与観察は、調査の対象である社会あるいはその一部への研究者の「社会化」として、もしくは「共感－理解的追体験」として、しばしば言い換えられる。フィールドワークに際してはその他の方法と相違して、インテンシブで個人的な「特別な体験的次元」を研究者はもつことになる。それへの理解は、実は、誰かの社会的現実についての解釈学<sup>原注4)</sup>と現象学<sup>原注5)</sup>の理論的考察に基づいている。すなわち、共同体験によって、社会的ふるまいの意味が解釈可能になるのであり、そのふるまいは、個人を超えて存在する文化的意味の諸関係に位置付けられるという。その目的は、生きられた日常の複雑性の中に

あってそのような複雑性自体を理解すること、調査対象の「内側」に接近すること、すなわち、現実への「イーミック」な接近に到達することである。さらなる特徴は、最新の議論においてはますます問題視されていることだが、調査と描写の「全体的」な性格である。こうした総合的アプローチにおいて目的とされているのは、しばしばフィールド研究の成果をまとめた「モノグラフ」において為されているように、当の文化を出来得る限り包括的かつ総体的に理解し描写しようとすることである。個別現象は全体の文脈に位置づけられるべきであり、また、文化の全体的な文脈から切り出された個別要素は、その全体に関する知識のもとでしか理解することができない。

フィールドワークの同義語として、時おり「エスノグラフィ」という概念が使用される。この言葉は、古典ギリシア語の「ethnos」（＝民／人びと／民族）と「graphein」（＝記述／書くこと）から構成される。狭義にはある文化を記述的に描写することを意味する。学術史的には、エスノグラフィは、（諸）文化に関する理論形成の学であるエスノロジー（logos＝学）と対置される。エスノロジーの文脈では、エスノグラフィという専門用語は、対象記述だけでなく、モノグラフの基礎をなすデータ獲得の方法の意味でも用いられている。したがって、エスノグラフィはフィールドワークの上位概念として使用されることもある。この点は、ヨーロッパ外社会を対象とした「古典的」エスノロジーにおいて、フィールドワークが方法論として優勢だったことから理解することができる。

## 2、諸学問における位置付け／民俗学史的な位置付け

フィールドワークという方法は、今日、社会学や心理学など、様々なディシプリンで使用されている（[Legewie 1995] 参照）。フィールドワークは、ジャーナリズムや教育学（[Hug 1996] 参照）、市場調査やコマーシャル制作、芸術家の活動にいたるまで、日常生活へのアプローチの手段として当たり前使用前に使用されるようになった。それどころか、「フィールドリサーチ」のタイトルのもとで、商業的世界の職業教育の一部にすらなっている。とりわけ、民俗学／ヨーロッパエスノロジー、ならびにエスノロジー（英語圏の文化人類学と社会人類学を意味する民

族学〔フェルカーンデ〕において、現代研究の基礎的技術のひとつと見なされている。

インタビュー（とりわけ質的インタビュー）のように、フィールドワークの基礎的方法としての（参与）観察も、人間の日常的技術を学術的方法として体系化したものである。参与観察の場合、それは、学習的な体験を介して状況を観察し、理解することを方法化している（インタビューの場合は、言語によるコミュニケーションという人としての日常的ふるまいの学術的方法化である）。かつての、学術的に整理された方法をもたなかった頃のフィールドワークの萌芽は、他地域に旅行し、土地ごとのふるまい方の規則や習慣を観察し、それを描写した記録の中に見出せる。しかしながら、フィールドワークという方法論が、はじめて学術的に体系化されるのは20世紀になってからのことであり、それは「シカゴ学派」とくにエスノロジーの文脈で発生した。その中でフィールドワークは、方法の「王道」として重要な位置を占めており、1960年代以来、大学での専門教育にも組み込まれている。

「エスノロジー」（フェルカーンデ）において、フィールドワークは、（外国のものに限らず）文化への接近法として中心的位置付けにある。それは新米エスノジストのイニシエーションであり、通過儀式であり、試練であるといえる。あるいは、同時に、フィールドワークは神話としてあり、イデオロギーとしてあるといっても良い（〔Kohl 1986, Stagl 1995〕参照）。エスノグラフィの主要な特質は、すでにヘロドトスやタキトゥスによる古代の諸民族の記述の中にみることができる。とりわけ顕著なのは、18世紀以来の旅行者やグランドツアー、あるいは主に19世紀に執筆された宣教師や植民地の役人による報告書である。方法論の学術的組織化の端緒は20世紀初頭にあった。19世紀のアームチェア・エスノジストへの批判的な境界づけが行なわれたのである。アームチェアの上で、旅行者や宣教師、行商人のようないわゆる「アマチュア研究者」の資料に基づきつつ行なわれる、広範囲にわたる進化論的な文化記述が問題として指摘された。19世紀末の学術的分野としての定着にはじまるエスノロジーの専門化の過程において、はじめは自然科学者としての教育をうけた研究者の中間世代によって<sup>原注6)</sup>、しだいにデータ獲得のプロセスが<sup>つよく</sup>考慮されるようになった。「フィールドにおける研究者」は、海外から質問をしに来たどこかの誰かというような存

在であってはず、むしろ、そのディシプリンのエキスパートであることがよく求められるようになったのである。それとともに、1920年代以来、イングランドのイギリス経験論の領域で、経験的アプローチへの展開が発生した。この過程において、社会への参加の方法として、その土地の言語の習得と長期にわたってフィールドにとどまることを必須とする文化研究が注目を集めた。

近代的なエスノグラフィへの展開は、特に、ポーランド出身のイギリスのエスノロジストであるブロニスワフ・マリノフスキ (1884-1942, Bronislaw Malinowski) の功績であったといえる。彼はフィールドワークの老大家として認められている。一般に、マリノフスキは「社会人類学」およびイギリス機能主義に影響力を及ぼした代表者として知られ、その一方で、専門的教育をうけ、かつインテンシブで近代的水準にかなう方法で研究を行なった最初のエスノロジストとされている。加えて、彼は民族誌的リアリズムのジャンル形成を促した。それゆえ、マリノフスキはフィールドワークとその表象形式の中心的先駆者であった。彼の研究の基礎は、第一次世界大戦のさなか、1915年から1918年にかけて、ニューギニアの南島に位置するトロブリアンド諸島に滞在したことで形成された。彼はそこで人びとの生活の場に参加し、土地の人との会話や日々のふるまいの観察、あるいは体系的な調査を行なうことによって、当該地域における経済・呪術・性差の関係、あるいは一年のサイクルなどを明らかにした。この滞在に基づいて、マリノフスキは一ヶ所滞在型のフィールドワークの基準を確立したのである。すなわち、一年以上の月日をかけて（一年という時間は、農業と関わる文化的な年間サイクルに基づいている）、通訳者に頼ることなく現地語に習熟し、異文化への可能なかぎり全面的な参入を求めるようなフィールドワークのあり方である。マリノフスキは「カメラ、ノート、鉛筆において、目前に行なわれているものに加わる」ことを求めた。彼によれば、研究の最終的な目的は、行為者の視点、イーミックな描写法を手に入れること、すなわち、「ネイティブの視点を獲得すること」であった [Malinowski 1953 (1922): 25]<sup>訳注4)</sup>。フランツ・ボアズ (Franz Boas) のインフォーマントを重視する方法と相違して、マリノフスキは感情を抑制し、友好的な姿勢のもとでの参与観察を重視した。マリノフスキのフィールドワークの方法が学術的に体系化されたものであることは、彼が自身の方法的規則と法則

をあらかじめ明らかにしている点からもわかる。その規則と法則は、モノグラフ『西太平洋の遠洋航海者』[1953 (1922)]において記述されている。

ここで形成されたフィールドワークの理想は、フィールドワーク神話と本格的なフィールドワークブームを発生させたが、この神話とブームは、『マリノフスキー日記』[1985 (1967)]の刊行によって揺るがせられることになった（この点は以下で再論する）。しかし、あらゆる批判的な議論にもかかわらず、フィールドワークは、今日でもエスノロジーの中心的な方法的レパートリーの一部であることに議論の余地はない。それどころか、ディシプリン全体の基礎であるとも言われている。エスノロジーにおける方法論の変化についてはここでは詳述しないが、「アンソロポロジー・アット・ホーム」の意義の増大、再調査・追跡調査の実行、単独調査イデオロギーにかわる夫婦／家族あるいはチームによる研究へのスタンダードの修正、あるいは、1950年代から1960年代にかけてイギリス「社会人類学」において構想された「拡張事例研究法(Extended Case Study)」などの理論的細分化の動きがある。それらについては、すでに膨大な解説が存在し、とりわけ、英文のフィールドワークの参考書において詳細に議論されている（本稿の文献リストを参照）。これらへの言及にかわり、本稿では民俗学におけるフィールドワークの位置付けを追究することにしたい。

社会学におけるフィールドワークは、19世紀後期のイギリスにその萌芽が見出し得るが、本格的に行われるのは1920年代以降、とくに「シカゴ学派」におけるホームレスや青少年、若者仲間、ダンスホールの研究の中で体系化されていった。シカゴ学派のフィールドワークは、産業革命以降の社会的諸問題への志向、特に、シカゴという都市の具体的な変化とのかかわりで行なわれていた。折しも、シカゴは小さな都市から300万もの住民を抱えるメトロポリスへと拡大していた。シカゴ学派の代表的研究者ロバート・エズラ・パーク (Robert Ezra Park) は、近代の巨大都市を社会的実験室とみなし、そこでの「忍耐づよい観察」(method of patient observation)をすすめた。フィールドワークは、社会学においても、その場で出来事に参加することを通して、自身の属す社会の部分的な現実への理解を深める手段として期待された。この観点において指針となったのは、ボストンのイタリア人街の社会構造を対象

としたウィリアム・フート・ホワイト (William Foote Whyte) の研究『ストリート・コーナー・ソサエティ』[1943]であった。当該研究において、ホワイトはストリートギャングのメンバーである13名の20代の若者に対し、2年間にわたる参与観察を行なった。通称で「ドック」とも呼ばれるアーネスト・ペシ (Ernest Pecci) というキーパーソンへの親密なコンタクトを通して、ホワイトはローカルな社会関係に接近し、理解を深めていった。ギャングの組織と貧困地区の全体を把握する目的で、彼は「コーナー・ボーイズ」の仲間内における日々の交際、具体的なヒエラルキーの構成、たとえば女性などの部外者へのふるまい方の基準についての観察調査を実施した。

社会学におけるフィールドワークは、シンボリック相互作用論、特に、観察に発し、その理論化によって導かれる「グラウンデッド・セオリー」[Glaser/Strauss 1967]とエスノメソドロジーを通じて、さらなる理論的發展を遂げた ([Weingarten/Sack/Schenkein 1976] 参照)。しかし、フィールドワークは、社会学全体の中では従属的かつ補足的役割しか与えられていない。すなわち、ある研究計画の最初のフェーズである予備調査における方法的選択肢の一つでしかないのである。しかし、企業研究や組織研究 [Kühl/Strodtholz 2002] などの一部の研究では、フィールドワークは優先的な方法とされているし、エスノメソドロジーのような特別な理論的方針を支持する社会学者にもフィールドワークは重視されている。しかしながら、エスノロジーがフィールドでの体験やそこでの出会いを重視するイデオロギーのもとでフィールドワークを優先的方法とするのに対して、社会学がフィールドを重視するのはきわめて例外的なケースにおいてのみであるといえる ([Girtler 2001] 参照)。

以上、エスノロジーと社会学におけるフィールドワークの位置づけを確認してきたが、以下、「民俗学／ヨーロッパエスノロジー」の話題にうつりたい。「民俗学／ヨーロッパエスノロジー」の学史においては、フィールドワークはとりわけ1980年代以来、中心的なアプローチとして重視されている (例えば [Jeggle 1984])。今日の歴史的論証を重視する民俗学においては、フィールドワークは現代研究の優先的なツールではあるが、他の方法や資料による補足も行なわれている。もっとも、民俗学におけるフィールドワークの伝統はさらに掘り下げることができ



る。民俗学におけるフィールドワークの歴史も、他文化を対象とするエスノロジーと同様に、旅行者や学者による記述からはじまる。民俗学分野において、学術的インスピレーションの導きのもとでフィールドワークを行なった初期の経験主義者として、ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール (1823-1897, Wilhelm Heinrich Riehl) は注目にあたいする。劇的な変化をとげた 19 世紀の社会の中で、とりわけ農村の生活についての知識を保存しようとする努力の中で、カメラリスムス (国家経営学) の認識関心によって特徴づけられつつ、彼は旅行記作者の伝統のもとで、さまざまな地域を訪ね歩いた。たとえば、レーン (Rhön) やプファルツ (Pfalz)、あるいはアイフェル (Eifel) のような土地で、非常にひろく読まれることになった彼の著作の素材が集められたのである。リールは自身の方法を「民俗学的研究の秘伝 (Handwerksgeheimnisse des Volksstudiums)」というタイトルで説明している [1892 (1869)]。その著作の中で、リールは研究者の役割ならびに様々なインタビュー法を反省し、遍歴によって理解を深めるような短期的な調査旅行ではなく、「半帰化」することを要求する。「半帰化」とは、人びとの生活の中にとどまることを意味している [Riehl 1892 (1869): 4]。すなわち、経験的文化研究の必要条件は、自分自身で体験すること、「自身の足で歩み、自身の目で見て、自身の耳で聞く」こと (同書) であるとリールは述べている。あらゆる認識獲得に必要なものとしてリールは思考の指針を明言しているが、そこからは彼の方法の演繹性と彼の「秩序化する視線」 [Jeggle 1984a: 20] の存在をうかがうことができる。これについて、原典では以下のように記述されている。

人はしばしば私の観察眼を称賛する。しかし、そういった称賛は曖昧なものである。何故ならば、単なる観察はあまり意味がない。発見されたものを観察するのは簡単である。しかし、観察したいものを発見するのは難しい」 [Riehl 1892: 12ff.]。

民俗学／ヨーロッパエスノロジーにとってのヴィルヘルム・ハインリヒ・リールの役割をめぐっては、1970 年代末から 1980 年代にかけて論争が発生した。そこでは、リールの保守的社会教育の政治的な性質や、とくに彼の演繹的方法が焦点とされた。この論争は民俗学者の方法意識



を先鋭化させることにもなった。この中で、リールはそのすべての学術的価値が否認されたが、他方で、彼は民俗学、とりわけフィールドワークの創始者としての価値が認められた（[Deißner 1997] 参照）。リールの方法論はたしかに疑義をはさむべき余地があり、批判されるべきものである。しかし、リールに二つの功績があることは確かであろう。一つは、著作の文学的性質である。もう一つは、民俗学的対象への経験的アプローチ、すなわち、対象に自分自身で出会い、体験し、またその必要を説いた点にある。

リールとは反対に認識論的な観念をもたず、かつ旺盛な収集熱の持ち主として知られるリヒャルト・ヴォシドロ（1895-1939, Richard Wossidlo）も同様に、経験的アプローチを選択した。その「収集者の視線」（[Jeggle 1984a: 25ff.] 参照）によって、ヴォシドロは語り研究に巨大な資料の集積を残した。彼もまた熟慮された方法を、「民俗的伝承収集のテクニック（Technik des Sammeln volkstümlicher Überlieferungen）」[1906] という手引書において表明している。その中で、ヴォシドロは資料産出の方法や、状況によっては効果的であるような秘密裏の調査<sup>原注7)</sup>、インフォーマントとの信頼関係とも関わる研究者の役割の問題を論じている。同時に、ここからはヴォシドロの方法の純粋な記述性が明らかになる。

20世紀にはじまる民俗学のアカデミックなディシプリンとしての組織化以来、フィールドワークは、語り研究や地域社会研究（例えば [Dégh 1962]）のような特別な課題領域において効力を発揮してきた。その際、体系的な観察法も実用化されてきた（例えば [Lehmann 1976]）。1970年代以降、民俗学の経験的現代学へのシフトチェンジ、学史や課題、未来についての批判的検討に伴って、フィールドワークという方法論的に精査されたアプローチは、さらに基礎的な重要性を増している。一時期の民俗学の明確な社会学化は、とりわけ、量的方法への方向づけをはらんでいた。続く1980年代には、ほかのディシプリンと同様に<sup>原注8)</sup>、エスノロジー化が進み、フィールドワークのような複雑かつ質的な研究方法が重要視されるようになった。「民族誌的次元の再生」[Jeggle 1984a: 13] への要求とともに、アクターの日常文化と生活世界への方向づけが発生した。学史的にみると、民俗学は研究課題を、観察された人びとの社会的・生活世界的コンテクストのもとで考える傾

向をみせるようになった<sup>原注9)</sup>。表象の危機と、文化の關係的・過程的・動的性質への問題意識（[Bausinger 1987] 参照）は、1990年代以来の、複雑で多方法的アプローチと、「社会のミクロな領域における文化的日常」への質的な接近こそを民俗学的なるものとして固定化する機運をさらに促していった [Gyr 1997: 16]<sup>原注10)</sup>。

### 3、研究実践1——構想とプランニング

実際の研究実践の中では、研究の計画立案、データの収集とその分析、それらの文章化の間に明確な区別を設けることは不可能であるが、方法論の導入的解説では、しばしばその特徴や問題点において別個のものとして記述されている。しかし、理論的検討や事前の仮説構築、事後の理論化は往復的に行なわれるものであるというスタンスは、あらゆるインテンシブなフィールドワークに通用する原則の一つと認識せねばならない ([Spradley 1980: 29 参照])。

フィールドワークは、日常的な出来事への社会的参加を基礎とする。それゆえ、細部まで調査計画をたてることは困難である。しかし、フィールドワークとは、何の考えもなしとにかく現地に飛び込めば良いと言う、浅はかな方法では決してない。事實はむしろその逆である。フィールドワークの開始に際しては、膨大な文献研究をふまえて、自身の問題意識や対象についての認識を確定する。無論、それに先だって、フィールドワークという方法によって解明可能な問いをたてる必要がある。例えば、修道院での生活、日常の実践に際するエスニックな分類の影響力と幻影、都市や町内会で開催される祭のようなローカルな社会的出来事などへの問題提起が可能である。これらの大きなテーマは、いくつかの部分的問題意識に分解され、適切なアプローチが試行錯誤される。各テーマは、このような手順によって、現実に研究可能なものとして鍊られていくべきなのである。それに続き、一般的な目的設定のもとでは、具体的な調査領域（例えば、特定の場、組織あるいは社会的集団）ならびに、目的に適した調査地、出来事あるいは個人が選択される。その他の質的アプローチ（[Flick 1996] 参照）と同様に、フィールド調査の中でも事前の問題設定は変更ないし具体化されることもある。参与観察を他のアプローチと比較するならば、基本的に、個々の仮説の検証作業な

どよりも、新たな問いや関係の発見、問題の産出に適した方法であるといえる（[Legewie 1995: 191] 参照）。対象<sup>原注11</sup>の観察可能性やフィールドとしての設定可能性は、研究の前提に関わる話題でもあり、かつ、反省的に考察すべき問題でもある。

フィールドワークによってアプローチ可能な「フィールド」は様々である。慣習的には、一望のもとに見渡すことができ、その全体的な概要を把握しやすい場所がフィールドワークの対象とされた。ヨーロッパ外の社会を対象とするエスノロジーにおいては、とりわけ、島や単独の村落のような場所が選ばれてきた（[Fischer 1985] 参照）。民俗学／ヨーロッパエスノロジーにおいても、主として非都市的な村落や教区での調査が行なわれていた。今でもそのような場所が経験的アプローチの対象にされることがある（例えば、キービンゲン [Kiebingen] での調査 [Ilien/Jeggle 1978]。また、[Metzger 2004] 参照）。同様に、街区や広場、個々の街路のように、境界づけ可能とみなされる都市的な場も対象化されている（例えば [Welz 1991]）。社会学と同様に、病院やパン屋（例えば [Götz 1997]）のような企業や施設など、組織として境界づけされたユニットも、民俗学／ヨーロッパエスノロジー的フィールドワークによって調査可能である。それと同時に、特殊な社会集団あるいは社会環境の日常がフィールドワークによって調査される。例えば、サッカーファンの世界 [Schmidt-Lauber 1994]、ホームレスやエスニックグループ [Schmid-Lauber 1998, Becker 2001]、や宗教的少数派の集団などである。あるいは、家族のような社会構成単位についての研究も存在する。

本来的には異国の地で持続的かつ一ヶ所滞在的なフィールドワークを行なうエスノロジーと違って、民俗学／ヨーロッパエスノロジーは、大抵の場合、研究者にとって文化的にも社会的にも身近な領域を対象とし、近年では、村や離島とちがって簡単に全体を見渡すことの困難な都市的環境のようなフィールドでもしばしば研究が行なわれるようになっていく。したがって、フィールドへの短期滞在、フィールドへの頻繁な往復とインタビューを重視する点は、「民俗学的フィールドワーク」の特徴と見なされる（[Welz 2005: 25f] 参照）。それにもかかわらず、エスノロジーと民俗学の方法は、基本的に異質のものではない。ゆるやかな段階的差異があるに過ぎないのである。例えば、調査の時間的フレームの

選択について言えば、どこまでが短期で、どこからが長期であるかという点に明確な回答を出すことはできない。あるいは、対象とする集団の他者性のグラデーションも、どこからが他者で、どこまでが自文化なのか、明確な境界づけは不可能である。

問題提起のコンセプトとその処理方法の明確化に続いて、テクニカルなプロセスとしては、スケジューリング、調査対象とする個人（集団）の選択についてのプランニング、インタビューパートナーの人数に関するおおまかな目標設定などの具体的な研究計画の立案、ならびに、フィールドにおける最初のコンタクトの開始、形式的前提の明確化（資金の確保、場合によっては法的許可や技術面に関する準備など）が行なわれる。これらの準備をふまえて、目標や計画している手段について、フィールドワークの概要を作成しておくことは有意義である。

フィールドで第一に行われる「経験的調査」は、大まかには以下のフェーズに区分される。はじめに、フィールドへのアプローチに役立つ「探究的フェーズ」である。地域的概要の把握と人間関係の構築、ならびに、調査の実行可能性の検証、あるいは問題意識の具体化である。それに続くのが「特定問題に照準した」インテンシブなフィールド研究である。これにより、調査目的に適ったデータが産出される。その際、質的インタビューや体系的な観察、構造化されたアンケート調査などの方法が使用される。ここで考慮すべき点は、観察とインタビューの目標の相違である。観察という方法は実際の行動やふるまいを、インタビューは調査対象者の自己像や思考、解釈を明らかにする。ただし、観察とインタビューの成果は、部分的に矛盾する場合もある<sup>原注12)</sup>。場合によっては、集団間の紛争や葛藤、「拡張事例研究法」のように特定の状況に焦点を置いた観察も重要である（[Bachmann-Medick 2002: 338f.] 参照）。

フィールドワークの適切な「期間」については、一般的な回答を示すことはできない。その目標設定やフィールド、研究条件や予備的知識の状況によって左右されるからである。いずれにせよ、包括的でインテンシブな手法（時間的意味ばかりではない）であるという点が重要なのである。結局のところ、インフォーマルな会話や出会いが、研究テーマにとって有益な情報をもたらすことがある。学術的な重要性の見込まれないような日常会話であっても、突如として、調査に関わる会話へと移行

することがある。調査の「終わり」には、資料の「飽和段階」が訪れる。すなわち、調査を通して新たな認識がもたらされなくなったとき、素材は「飽和点に達した」ものと見なされるのであり、ここでその調査を終えることになる。同時に、フィールドワークは時間や費用などの様々な制約によっても限定づけられている。総じて、フィールドワークには、多くの場合、研究段階に明確な移行点があるわけではなく、むしろ連続的に推移する。検討を要する細部の問題にねらいを定めた調査が再度行なわれることもしばしばである。研究段階の移行を決定づけるのは、日常生活のダイナミズムとそれへの参加である。研究者は、それによってつねに新しい認識と疑問へと導かれるのである。

#### 4、研究実践 2

##### ——相互作用プロセスとしてのフィールドワーク

参与観察は対話的方法であり、研究者は自己そのものを研究の手段とする（[Dammann 1991] 参照）。認識獲得の基礎とされるものはフィールドにおける研究者の体験である。すなわち、人間との出会い、研究を目的とする会話、人びととの交流が文化的意味を生み出すのである。それゆえ、フィールドワークに際しては二つの判断能力が必要となる。すなわち、エンパシー（感情移入）の能力と自己反省の能力である [Ziegler 2001: 143ff.]。体系的な観察法とはちがって、参与観察的方法的アプローチは質的研究に適し、ほとんど構造化されることはない。とりわけ、アプローチのあり方は調査対象であるところの生活世界の性質、ならびに、フィールドでの相互作用によって規定されることになる。それゆえ、方法を規格化したり、手引書で行なわれるように手法を形式化することは不可能であるが、以下で述べるように、フィールドワーク一般において繰り返し発生する問題を指摘することはできる。

それぞれのフィールドワークにおいて、「研究者の役割」は決定的な意味をもつ。そのため、フィールドへの「入り方」とアプローチ法を考える上では、この点を特に配慮せねばならない。フィールドへの入り方に関しては、研究テーマの性格や特徴によって、三つの方向性が考え得る。一つは、特定の人間（ある集団の「ゲートキーパー」的存在）を対象とする行き方、もう一つは特定の機関を対象とする行き方、そして、

偶然的な出会いを促すようななんらかの重要な出来事に参加する、という行き方である。効果的な調査は、研究者がフィールドの人びとによく知られ、かつ納得のいくような役割をふるまうことで可能となる。とりわけ、部外者や初心者の態度をとることの有効性は多くの研究実践において証明されている。つまり、対象集団の生活世界のあり方に関心をもっている存在として、あるいは、対象集団への参入のためにそこでの諸関係の説明を欲している存在としてふるまうことである<sup>原注13)</sup>。しかし、このようなふるまい方以外に、対話パートナーの性差や年齢、出身地域やエスニシティ、あるいは出身国、社会環境や教育程度の相違のような要因も、研究者が現地で割り当てられる役割やそこで結ばれる人間関係に影響を及ぼす。

人との出会いには、その深さと質をめぐる多様性が存在する。研究者が調査を行なううちに、一人のインフォーマントとの間に個人的なつながりが構築され、その人物が中心的な話者になっていくことで、さらなる話者とのコンタクトにつなげてくれたり、研究者を社会的なネットワークの中に引き入れてくれる、ということがしばしば発生する。しかし、そのような一人の人物の導きのみ依拠するのではなく、別の道筋からのコンタクトを試みることも重要である。スノーボールサンプリングと並んで、例えば、別の人物（や集団）に調査目標を定めたアプローチや、調査事項についてのエキスパートを選択する方法もある。以上のような複数のコンタクトが行なわれてはじめて、フィールドワークの特徴であるところの社会的・文化的生活の多層性への接近が可能になるのである。ローカルな出来事、例えば、調和的かつ強い団結のもとに進行していると誤認されていた記念式典の参加者の意識が実はまったく多様であり、それどころか、それぞれのアクターの思惑に起因して競争的な状況にあるというような点は、様々な人物へのコンタクトによってはじめて明らかになるのである。

いずれにせよ、フィールドでは様々な行動の可能性が研究者に開かれることになる。したがって、フィールドワークという方法の特徴は、そうした可能性の中で、研究者が様々な役割転換をする点にある。原則的には、参与観察は「近しさと隔たり」という矛盾する態度のアンビバレンスの特徴とする。一方では、研究フィールドに参加し、エンパシーをもつことが要求され（「参与」）、他方では、同時に距離を保ち続けねば



ならない（「観察」）。「文化の内にながら、その文化を外から眺める」というジレンマからは<sup>訳注5)</sup>、しばしば公正性についての葛藤<sup>原注14)</sup>と役割の混乱が発生する。エスノロジーの文献においては、例えば、「ゴーイング・ネイティブ (going native)」という語は「カルチャーショック」という言葉と並んで大きな位置を占めており、異文化体験における常套的な言い回しであるといえる。「ゴーイング・ネイティブ」とは、いわゆる、観察者であることを断念して、調査対象地との強固なアイデンティフィケーションを行ない、研究者の（出自・素性にもとづく）アイデンティティを溶解させることである。

フィールドワークというアプローチを特徴づける社会的ダイナミズムは、長らくの間、それ自身が分析対象となってきた。研究者は観察するだけではない。彼は観察されるし、調査成果の中には、インフォーマントが調査者に合わせて発した回答も含まれている。それゆえ、相互作用プロセスの分析とインフォーマントをめぐる分析が必要となるのである（[Lindner 1984] 参照）。観察という行為の相互性は、認識論的かつ方法論的な深い反省の対象となってきた。研究者という人間も議論の視野に含まれることになったのである。そのような反省の出発点は、「民族誌的表象の危機」（Berg/Fuchs 1993）と表現された、文化記述の客観性と適切性への疑義であった。1960年代以来、エスノグラフィックな表現をめぐる信頼性への疑念が発生している。まず、プロニスワフ・マリノフスキの死後に刊行された個人的な日記（1985 [1967]）が、エスノロジストの中立性への盲信と結論の客観性を大きく動揺させた。この日誌は、それまでのマリノフスキのイメージとは全く異質の人間像を出現させたのである。そこには、トロブリアンド諸島の人びとへの否定的な意見や一般にひろまっている偏見、性的な幻想が記述され、また、著者のトロブリアンド諸島からの脱出願望や様々な脱出の試みが行なわれたことを知ることができる。エスノロジストの人間的な内面生活と感情生活の可視化は、彼のフィールドワークに要求された事柄と現実との間にある矛盾を明確に示していた。そして、とりわけ、認識獲得における主観性の意義への注視を導くことになった。

それゆえ、学際的に拡張された「主観性論」においては、研究者のフィールドにおける役割、その感情や態度が調査結果に及ぼす影響が反省された（[Devereux 1984[1967], Greverus 1995, Davies 1999]参照）<sup>原注15)</sup>。



その議論のなかで、研究者による広範囲にわたるフィールドへの影響を軽視し、あたかも研究者がそこにいなかったかのように出来事を再構成する、客観主義的理想への批判が増加していった。

また、「リスタディ」を行なうことが支持され、同じフィールドへの異なる時点での調査が繰り返し行なわれた。研究者は、彼の前任者と同じ調査フィールドから、基本的に異なる成果を入手していったのである。その中で、エスノジカルなナラティブに対する懐疑的態度が強められていった。例えば、オスカー・ルイス (Oscar Lewis) が1960年に行なったメキシコの村についての記述は、ロバート・レッドフィールド (Robert Redfield) の成果 [1949] とは根本的に異なるものとなった。テポストラン (Tepoztlán) は、30年前には均質で調和的なまとまりをもつ集落として表現されていた。それに対し、ルイスの眼差しにおいては、テポストランは暴力がしばしば発生する場として紹介されたのである。貧困の文化の結果として、住民は、利己主義や嫉妬、疑念によって特徴づけられたのである。著名な対立としては、アメリカの人類学者マーガレット・ミード (Margaret Mead) のサモア社会に関する記述 [1928] とデレク・フリーマン (Derek Freeman) の「リスタディ」 [1983] もあげることができる。ミードによれば、サモアは調和的で、自由で奔放な性観念をもち、競争のない社会として記述された。それに対し、フリーマンは、卓越した競争社会、非常に厳格な処女性重視の観念、児童虐待ならびに顕著なヒエラルキーをサモアに見出した。明らかな結論の相違は、エスノジカルなデータの捏造への疑いを惹起した。そしてさらには、エスノジカルな認識の限定性に関する深い反省が導かれることとなった。例えば、調査の条件や文化理論的前提および目的といった点が反省の対象とされた。研究者の個人的な学術的功名心とともに、フィールドにおける研究者のそのつどの参入のあり方、例えば、土地の言語を使用する能力や文化的なふるまいの基準、ならびに、その(理論的・専門的ならびに社会的な)素因も、その研究成果に影響していることが明らかにされた。例えば、マーガレット・ミードによるサモアの記述は、通訳者とともに行なった研究の成果であり、積極的な調査が行なわれたのは9ヶ月間のみであったこと、そして、「生得と教育」あるいは「自然と文化」をめぐる論争を背景とする理論的関心を追究するための調査が行なわれ、人びとは社会的環境に規定された存在として

扱われている。これについて補足しておくならば、彼女がアメリカからやって来た23歳のアカデミックな研究者であったというステータスと、サモアの人びとの文化的な礼節の形式が、対話パートナーからの回答に影響を及ぼしていた。このような要因は、フィールドワークを相互作用のプロセスとして不可避的に特徴づけているのである。そうは言うものの、とりわけ関心の的になったのは、研究者の表象実践であった。

民俗学／ヨーロッパエスノロジーにおいても、フィールドにおける相互作用性や「攪乱」は、回避すべき異常な苛立ちの対象ではなく、むしろ、非常に重要な認識を可能にするものであり、発見的で有益な情報として調査に役立てられるべきであるという意識が発生してきた。例えば、研究者はしばしばスパイとして疑われることがある。このような評価は、ある種のヒントとして考えられる。つまり、調査フィールドに不信感が満ちていることや（階級制度的な）関心の対立が存在することがここからはわかるし、また、フィールドにおいてその都度とるべき態度の基準や、社会構造・政治的文脈に敏感になるべきことを研究者に教えてくれる。このような、相互作用プロセスおよびロールプレイングとしての参与観察をめぐる幾つかの考察は、「研究者のフィールドへの恐怖」という言葉で総括される。この言葉は、研究における親しさと距離の難しい関係のあり方についての表現としても使われるようになっている[Lindner 1981]。

相互作用プロセスと研究者の主観性への反省は長期にわたって学際的に議論される中で、分析資料として受け入れられるに至ったのであるが、「感覚的体験」としてのフィールドワークとその資料としての価値に目が向けられてきたのは新しい傾向である（[Bendix 2006] 参照<sup>原注16</sup>）。従来のフィールドワークにおいては、インタビューが相対的に重んじられてきたように言葉が重視され、また、観察調査において認識できるように、視覚に優位性がおかれていた。これらに対し、エスノグラフィへの適切な五感の反映は、フィールドへのアプローチ可能性をさらに補うものといえるであろう。

フィールドワークには複雑な被制約性があること、研究者の性格や出自（[Gottowik 1997] 参照）によって調査成果が拘束されることが明らかになったことをふまえ、例えば、グループ調査や断続的な滞在が行なわれるようになり、方法的および分析的レパトリーが拡大することと

なった。それに加えて、研究者が行なってしまう逆転移（自身の価値観をフィールドに投影してしまうこと）や、防衛戦略としての不適切な客観化に陥ることなく、研究のダイナミズムを資料として使用するために、時にはスーパービジョン<sup>訳注6</sup>の制度化が試みられたこともある<sup>原注17</sup>。エスノサイエンスはモノグラフやその基礎である（しばしば文字化された）フィールドノートが、状況や態度あるいは人間を忠実に再現しているという考え方に別れを告げた。むしろ、それは、フィールドでのあらゆる感覚器官への刺激が均一のコード（たいていは言語か文字）にエンコードされることで結ばれる、いわば「無数のフィルターを通過した」表象なのである [Hauser-Schäublin 2003: 49]。それゆえ、データを記録するプロセスにはさらなる関心が払われるべきなのである。

## 5、研究実践3——記録、分析、記述

とりわけ重要なのは、フィールドワーク自体の詳細な「記録」である。記録作成に際して優先的に行われる文字化の作業は、すべての学術的観察調査の基本的問題を示している。

（参与）観察のもっとも難しい点は、その調査における二つの段階を区別することの難しさである。すなわち、出来事や人びとのふるまいを観察する段階と、観察された出来事の理由を検討したり、身振りや行動をふまえて人びとの感情や動機を解釈したりする段階である。この二つの段階は同時に行なわれるべきではない。第二の段階は観察の場ではなく事後に行なわれるべきであるが、この点に困難がある。それゆえ、できるかぎり観察対象を詳細に記述し、解釈の基礎を意識的に再検討することが不可欠である。

個々の対話とその状況の「記録」とともに、その場所／現場と時間／期間、その場に居合わせている人間の名称と社会的データ、状況的なコンテキスト情報ならびにその時々のできごとや行動、あるいは、テーマが書きとめられる。また、研究プロセスそれ自体も記録されるべきである。そのプロセスを記述するために作られた「フィールド日誌」は、のちに行われる分析にとって重要な資料になる。その中では、研究の経過や変化、つまり、社会関係へのアプローチをめぐる問題、さらには接触の方法や出会いのあり方、そして個人的感情や気分と同様に社会的・政治的

背景となる事件に関する全体的なコンテキストについての情報が記録される。同時に、そこは理論的検討、仮説が記述できる場でもある。さらには、そのつどの暫定的な結果、つまり以後の調査で取り組むべき問題点やプランを考える手掛かりを得られる場であり、従来の解釈に再検討が加えられる。このようなフィールド日誌の方法によって、動態的な認識産出のプロセスであるフィールドワークをプロジェクト終了後にも視覚的に理解できるし、追体験可能、かつ、分析可能になるのである。

フィールドの日常化、すなわち、これまで知らずにいたふるまい方や生活状況、社会関係への漸進的な順応が、フィールドワークの特徴である。したがって、はじめてフィールドに入った際の印象やディテールは可能なかぎり早く書き記されねばならない。出来事の細部は、時間的・空間的な隔たりのもとでは、もはや再構成不可能だからである。仮に記憶能力を養うことができるのだとしても、研究の手始めには、日々十分な時間を日記の執筆にあて、出来事や会話、キーポイントなどを、詳細な記録を作成するのに先立って書きとめておくことが重要である。口頭の発言を会話内容やパラフレーズの間接的描写によって識別し、回答-質問の順序を区別可能にする記号法のシステムを身につけることは役に立つだろう（例えば、異なる字体や色の使い分け。[Bachmann 2002: 340] 参照）。録音しなかった発言であっても、これらの方法で分析に取り入れることができる。記述のあり方としては、逐語的な引用文や間接的な発言のかたちで学術論文に包摂することができる。

フィールドワークが終るころには多様な資料が集まっている。すなわち、フィールド日誌、観察記録と並んで、インタビューのトランスクリプト、場合によっては調査中に撮影した写真や手紙、映像、モノ資料、公文書館の資料、およびその他の印刷物のような資料である。この多様なマテリアルの「分析」には、当然、さまざまな手法によるアプローチが行なわれる。たとえば、大抵は多大な分量に膨れ上がっている日誌を繰り返し読み込むことによって、分析テーマの設定や文化的リアリティの読解のあり方について検討を加えることができる。それと並んで、すべてのデータへの体系的なタグ付けや可視的なクラスタ化、あるいは個別事例の選択についての詳細な記述と解釈が可能となる。フィールドワークは、多様な資料や研究課題によって決定された方法的アプローチに基づいているので、その具体的な分析戦略も資料の多様性に則して

様々である。例えば、内容分析やインタビューの客観的解釈学、ネットワーク分析のような手法がとられることもある<sup>原注18)</sup>。

いずれにせよ、文化的生活の感覚的次元にまで至る理解を目的とし、かつ、フィールドにおける相互作用を特徴とする参与観察は、すべての具体的認識獲得の前提として、研究経過、フィールドでの出会い、発言の文脈依存性ならびに解釈の前提を公開することについての批判的反省を不可欠としている。それゆえ、発話の信頼性をめぐる問題、すなわち、研究者のどのような質問や態度が、インフォーマントの特定の反応を導いたのかという問いが、ここに関連づけられる。それらのインフォーマントの選択やインフォーマントへのアプローチ、具体的な調査法と分析の指標等への問いについては後述する。まず、読者には、データ収集のプロセスを迫体験してもらうことにする。

フィールドワークの成果は、文化的現実について、可能なかぎり具体的かつ真に迫った認識を提供する「エスノグラフィ」である。「エスノグラフィ」の中には、具体的な人間が姿をあらわす。そして、フィールドの場所性や雰囲気か迫体験可能となり、その人のふるまいと生活状況が可視化される。そのため、この手法にとって、記述的な表象実践のみが適しているわけではない。むしろ、フィールドワークの成果の発信に際しては、同時にその他の（例えば、民族誌的な映画のような）表象形式をも選択可能である。しかし、これらについてはここではこれ以上立ち入ることはできない（[Ballhaus 1995] 参照）。いずれにせよ、エスノグラフィの特徴は、日常と（文化的）体験への限りない接近にある。そこには、対話パートナーの（インタビューの抜粋という形式における）オリジナルの発言、出来事の迫体験を可能とする記述、文字資料の引用、時には研究者の個人的印象が含みこまれている。言うなれば読者の信頼を勝ち取る戦略として、研究者の日記や覚書を引用するケースもある。日記などの文言は、そのまま提示されているのではなく、推敲が行なわれていると考えてよい。例えば、ジビュレ・オブレヒト (Sibylle Obrecht) は、スイスのアウトバーンのレストハウスに関する論文の中で、研究日記から以下の文章を引いている。

人びとは、アウトバーンのテンポから切り替わることができない模様。このレストハウスのほうに突進してくる。ぶつかり合い、関わ

り合うことなどまったくなく、欲望のままに行動している。(中略) 一度、大きなグループが突進してきて、リズムを加速させる。私の隣のテーブルには英語圏の家族。男性は老年。手には会議用のファイル。興奮しているようで顔が赤い。女性はやや不機嫌。早熟そうな娘は、なにか高いものを注文するつもりだ。8スイスフランする様子である。男性は、家族の管理者的存在であることがわかる。彼は手持ちの残金を伝達している。12スイスフランしかもっていないのだという。彼は笑っている。全員コーヒーを注文するしかない。(中略) 無数の小さな家族劇場 [Obrecht 1998: 92]

細部への視線に特徴づけられるエスノグラフィの微視的分析であっても、当然、フィールドのそのままを表象するものではない。反対に、これは調査フィールドをより包括的な文脈のもとで把握するものなのである。例えば、記念祭の場合には記憶の文化に関する普遍的問題が、あるいは、特殊な都市空間を対象とする場合には、都市研究に関する包括的な問題設定をふまえる必要がある。したがって、その成果は、普遍的な問題領域の一例となるのである。

エスノグラフィは、研究対象あるいは日常のアクターにとりわけ接近する点で特徴づけられるのであり、「個人の人権の保護」という問題はここで大きな意味をもつ ([Kaase 1999] 参照)。フィールドにおけるインテンシブな出会いと人間関係は、それを記述する段階で、以下の問いをくりかえし呼びます。すなわち、インフォーマントが研究者との親密な関係に基づいて教えてくれたであろう情報のうち、どれを公表することが許されているのだろうか。研究者はアカデミックな世界に対して責任をもつものであるが、同様に、インフォーマントに対しても責任をもつ。では、そのインフォーマントへの責任は、どの程度まで負うべきものなのだろうか。この問いの背後には、倫理的な、そしてとりわけ法的な問題が潜んでいる。基本的に、インフォーマントに不利益を及ぼすような行動は許されないという大原則が存在する。これに関し、ヨーロッパエスノロジーにとっていつも助けとなり、また重要なのは、インフォーマントの「匿名化」という方法である。いずれにせよ、データを第三者に公開する場合、そこからインフォーマント個人が判別可能になってしまうような時は、事前にインフォーマントにその旨を知らせね

ばならない。

最後に、フィールドについてのエスノグラフィカルな文章が逆流し、彼らの文化的日常に影響を与える可能性があることにも注意を要する。民俗学／ヨーロッパエスノロジーは、このような研究成果の「還流」、それに伴う社会生活の多様な面への影響という問題について、すでに早くから反省的考察を行なってきたのである。とりわけ、「セカンドハンドの民俗文化」[Moser 1962] というキーワードは、文化の媒介プロセスを理論的に反省することを促した。そして、今日まで議論的である文化的行為の「オーセンティシティ」については、すでに1960年代に、「本物」と「偽物」に区別を設けるような議論から、パフォーマンスを重視する議論への移行がはじまっていた。

多様なデータからエスノグラフィックな論文を執筆することは常に難しい試みである。何故ならば、研究成果を文章にすることそのものも、批判的・理論的反省の対象となったからである。

## 6、テキスト化をめぐる議論——「文化を書く」

1980年代中期以来、まず第一にアメリカにおいて、テキストとそれを書く行為そのものを分析対象とする議論が燃え上がった。背後には、エスノグラフィックな表象の危機、そして文化概念・フィールドワーク・解釈学への反省の影響があった。すなわち、「ライティング・カルチャー」論争である。論争の名の由来は、同名の研究集会、あるいは、そこでの議論を編集したジェームズ・クリフォード (James Clifford) とジョージ・マーカス (George Marcus) の論集 [1986] にある。これにより、文化に関するテキスト産出への理論的反省が呼び起こされた。その成果が「メタ人類学」と称される分野である。そこでは、著者がどのような文章表現の手法によって文化を表象するのか、そして、どのようにエスノグラフィックな体験を文字に書き記すのか、どのように記述の適切性を読者に納得させ、真実らしさを演出しているのかが問題とされた [Marcus/Fischer 1986, Geertz 1990, Kea 1992]。それゆえ、エスノグラフィにおいて記述された文化は「単純」に知覚されたものではなく、また、写し取られたものでもないことが明らかにされ、それらはむしろ、著者によって「創出」され、構築されたものであること、すなわ



ち他者化 (Othering) と呼ばれるプロセス [Fabian 1993: 337] の産物であるという認識が徐々に広がっていった。その他のディシプリンにおいても、同様の反省が行なわれた。例えば、歴史学者ヘイドン・ホワイト (Hayden White) は [1990]、書き手が生み出した歴史の構造、歴史記述の前提と書き手であることの機能といった問題に取り組んでいく。

テキスト性をめぐる学際的な議論は、認識論的な転回との関連のもとに位置付けられた。すなわち、言語学的・知識哲学的作用が、「言語論的転回」として影響を及ぼしていった。世界を意味付け、理解可能なものにするのは言語であるという認識が、大きな衝撃とともに受容されたのである。さらなる転換は「解釈学的転回」のもとで発生した。すなわち、様々な言説の現時における (社会的、歴史的、個人的な) 被拘束性が指摘されるようになった。この流れの中で、民俗学/ヨーロッパエスノロジーもまた、分析形式と表現形式に関して、「厚い記述」に頼るといふ道筋を選択した [Geertz 1987]。この「厚い記述」という言葉は曖昧に使用されることが多く、ある特定の方法ないし理論、あるいはテキスト化戦略を同時に意味する<sup>原注 19)</sup>。この語の前提は、「テキストとしての文化 (文化はテキストである)」という理論的意識であり、これは記号論的文化概念をふまえた解釈的エスノロジーへの転回を意味していた。「文学的転回」あるいは「物語論的転回」は、学術的記述のナラティブ的構造と修辭的スタイルについての意識を高めた [Ziegler 2001: 146]。

この認識論的影響によって型押しされたテキスト化戦略の分析は、エスノロジカルな研究と表現における権力の行使と支配の意識化へと進み ([Abu-Lughod 1991, Knecht/Welz 1992] 参照)、研究主体への新たな理解と適切な新しい記述形式への要求に発展した ([Clifford 1993] 参照)。主観性を文字によって表現することが唯一許されていたのは、長らくの間、プライベートなテキスト (日誌や書簡)、小説やペンネームのもとで行なわれる述作 (Smith Bowen [Laura Bohannon] 1987) のみであったが、やがてエスノグラフィックなテキストの脱構築が行なわれた。これによって、エスノグラフィックなテキストは、主観的でヘゲモニアルなナラティブであることが明らかになった。したがって、研究成果の表現においても研究者の主観性は一段と大きな位置を占めるようになった。モノグラフにおいて文化の中立的で客観的なコピーを提示できると称すようなかつての「民族誌的リアリズム」にかわって出現したのは、「告

白文学」とも呼ばれる表現と、個人的なフィールドワーク体験の立体的な像を示す手法である。最後には、テキスト生成の再帰性をめぐる議論への方向づけが発生し、エスノグラフィにも同様に反映された [Fuchs/Berg 1993: 24]。

特に、「対話の人類学」は、1980年代以来、覇権的な文化記述との関係を断ち切り、それに立ち向かうことを目指した。対話的人類学の動きは、インフォーマントその人をより明確に論文中に位置付けようとする点に特徴がある。対話的アプローチをとる人類学が、自身とは無関係の情報提供者としてフィールドの人びとを評価するかわりに、研究プロセスの中で、例えば、コミュニケーションな検証<sup>原注 20)</sup>を手段とする分析に際しては、エスノグラフィックなテキストそのものの中に、それらの人びとを包摂しようとしている。すなわち、「対話の人類学」においては、研究者は人びとに「声」を与えるべきなのである。ある意味での「共同執筆者」として、研究者からなんらのコメントをも加えられないような発言の機会が与えられねばならない。対話的調査法とその新しい表現法の目的は、研究者の解釈者としての権力を弱めること、その解釈が諸説の中の一つに過ぎないことを可視化すること、それによって、「多声性 (Polyvokalität)」ならびに文化的現実構造の複数性の理解要求を満たすことである。

この流れは、1980年代から90年代にかけて、表現形式をめぐる無数の考察を導いた。そこでは例えば、インフォーマントの発言を詳細かつ改変を加えないままに表現するあり方や、研究者の解釈の適切な記述、あるいは、頁組ないしテキスト構成においてインフォーマントの言葉と研究者の解釈を別々に記述するなどの表現法が考案された。初期の例として、マージョリー・ショスタック (Marjorie Shostak) の著作『ニサ』(1986年刊)は、ニサ自身による様々なテーマについての語りと思われる部分に、エスノロジストによる解釈が続く構成となっている。これらの議論は、記述に際する「実験的形式」のきっかけともなった。ここにおいて、追体験的な理解の新しい表現方法と文体形式、例えば、コラージュ、フラグメント、ダイアログ、詩といった文学的形式の使用が試みられた。加えて、映像および写真の活用など、ビジュアル的な表象実践も試みられている ([Ballhaus 1995, Overdick 2004] 参照)。これ以後、芸術と学術の交流はますます増大している。

エスノグラフィの批判的脱構築が、テキストというものの、あるいは言説というものの厄介さを顕在化させたこともあった。メタ人類学の多くが分析の分析を行なうことで、この点を明らかにしたのである。他方、経験的研究とエスノグラフィックなテキストの執筆は、学問の後景に退いてしまった。大学生のみならずプロの研究者にとってすら、それらは明確に困難な課題となってしまったのである。何故ならば、適切な文化表象を、その複雑性のもとでどのように明らかにできるか、ということが重視されるようになったからである。しかし、メタ人類学、とりわけポストモダン的なアンチ・リアリズムも批判を受けなかったわけではない。特に、「自己愛的な再帰性」[Bourdieu 1993] という研究者の自己主題化傾向、ならびに、インフォーマントとの関係においてダイアローグを「過度に」強調してしまう傾向が批判の対象となった<sup>原注 21)</sup>。

今日、認識の多様な被制約性への批判的反省、ならびに、インフォーマントとの向き合い方における対話的方法は、研究プロセスと同様、記述プロセスにおいても、自明のものとなっている。しかし、研究者である「私」がテキストの中で常に明示されるのは、結論にとって有意義であると見なされる場合に限られるべきである<sup>原注 22)</sup>。

「ライティング・カルチャー」論争、および、それとも関連する研究者の主観性ならびに民族誌的表現のフィクション性、あるいは文学性の問題に関する議論は、この間にクライマックスを迎えていた ([Stanton 2004] 参照)。この論争の中で見出された著者の権力性等の問題には満足できる解決策はまだ示されていない。「フィールドの詩情」は、まだ見出されていない（創りだされていない）のである [Eisch/Hamm 2001]。この論争の中で要求された、対象への接近を伴う情景喚起的な文化学的表象形式は未だ実現されていない。それにも関わらず、文学研究や歴史学のような隣接分野においては、「人類学的転回」は持続的な衝撃として受け入れられており、このテーマは学際的な意義を有している（例えば [Bachmann-Medick 2004]）。

全体としては、「ライティング・カルチャー」論争は、あらゆる批判にも関わらず、重要かつ必然的な認識論的かつ方法論的意識の高揚を促した。その際、議論の焦点は、時間の経過の中で、データの獲得への問いからデータの表象への問いへと移行していった。そして、体験と解釈の規範は、いよいよダイアローグとポリフォニーの前に屈していくこと

になる。「ライティング・カルチャー」論争は重要な問題を投げかけた。すなわち、著者としての研究者の所在がその研究成果の中で可視化され、同様に、当該研究成果を成立せしめるプロセスの諸相互関係が明らかにされた。また、この論争は、学際的にダイアログの使用を活発化させ、その傾向は現在まで継続している。それは、この論争のテーマが、学術的研究のテキスト化、および、文化概念およびテキスト概念の認識理論的な基礎をめぐるものであったことがその理由であった。それゆえ、ライティング・カルチャー論争が過去のものであるとはいえ、そこでの基本的テーマや問題を取り上げ、批判的に反省しつつ自身の研究や記述実践に用いることは、民俗学／ヨーロッパエスノロジーのような経験的学問にとっては大きな意義があると言えよう。その影響は、以下の新しく開拓された新しいパースペクティブと研究領域などに顕著にみられる。例えば、従来の「スタディイング・ダウン（社会的下層研究）」と並んで「リサーチ・アップ」、すなわち、社会的上位にある人びとの生活世界の研究も行われるに至った [Warneken/Wittel 1997]。文化間の境界が曖昧化する中で、研究実践と反省的实践の変容は明瞭化している。したがって、そこにおいてはフィールドワークにおける調査対象の限定、またはそもそも限定可能か否かということ、新たに考え直さねばならないのである。

## 7、ローカル化戦略としてのフィールドワーク

### ——「シングルサイテッド・エスノグラフィ」と

### 「マルチサイテッド・エスノグラフィ」

表現形式の問題とならんで、フィールドの（空間的、社会的あるいは制度的な）限定可能性という問題は、フィールドワークの方法に関するさらなる批判的かつ理論的考察の出発点である（[Appadurai 2000] 参照）。近年までは、この主題は活発に議論されていた。離島や村落のように孤立した場所として誤認されていたフィールドでの研究は、多くの場合、文化を均質なものと捉えたり、境界づけられた統一体として記述してしまう危険性とともであった。1990年代以来、文化を閉じたものと誤認するイメージは批判的に検証されるようになり、文化理論的な前提への意識が高められた。しかし、この流れは、方法論的レパートリー

を拡張するきっかけをももたらしたのである。これについてのきっかけは、人・モノ・財貨、知的財産の流動化、文化の空間化とローカリティの問題を新たに生み出したグローバリゼーションの進展によって与えられた〔Hannerz 1995, Appadurai 1990〕参照)。フィールドワークの全体論的な要求と静態的な文化理論に対して増していく不快感は、流動化現象と文化的現象の多元的ローカリティ (Polylokalität) に対し、分析的<sup>原注 23)</sup>にも方法的にも適した経験的方法への要求を導いた。そのため、電子機器を介して実施される「イー・インタビュー (E-Interview)」のような方法が包摂されるようになり、その一方で、フィールドワークの硬直した手法が批判されるようになった。特に、重要性を増していったのは「マルチサイトッド・エスノグラフィ」であった。ジョージ・マーカスは、グローバル化時代における模範的なエスノグラフィを構想したが [Marcus 1995, 1998]、それによると、一つの地点にとどまるフィールドワーク (「シングルサイトッド・エスノグラフィ」) と相違して、マルチサイトッド・エスノグラフィでは研究者自身が旅をする。調査地の選択に際しては、研究対象あるいは人物につき従い、そのつど多様な場所、短期的で部分的な「訪問」を繰り返すことになる。境界づけによって空間を限定する方向性の修正は、「グローバル・エスノグラフィ」というコンセプトまで生み出している [Burawoy et al. 2000]。

フィールドワークにおいてより広域の調査対象地を設定するような近年の試みを挙げるまでもなく、空間的拘束を前提とする「静的」フィールドワークは、今も決して古めかしいものではない。方法の修正が必要なのは、ローカル化実践に関してではなく、その基礎となっている文化理解においてである。「場に固定された文化」という文化観を捨て去り、マルチローカルで動的なエスノグラフィに向かうのに伴って、研究者の関心は、文化の関係性、文脈依存性、過程性を、具体的に記録化することへと移り変わっていった。しかし、このような目的は、あらゆる文化学的研究において、たとえ従来の方法による研究成果であっても、フィールドワークを方法とするかぎりには、見出すことができる。調査対象を空間的に固定するアプローチ、ならびに、調査対象にあわせて場を移動していくアプローチは、どちらに優劣があるわけでもないのである。すなわち、どのような方法であっても、具体的な研究課題を学術的に解き明かす手段として適切なのである。

## 結びにかえて

近年、ポストモダン・エスノロジーのテキスト主義的または方法的疑念への反対運動として、エスノグラフィックな研究法と表象法のリバイバルが生じていたといえる<sup>原注 24)</sup>。その意義は、事実として、エスノグラフィックなディシプリンの境界をこえて広がっているようである。フィールドワークという概念と方法の意義は、学問を超えて認識されている。研究者ではない一般の人びともまた、人びとの体験や生活に接近することへの欲求を有しているのである。例えば、エスノロジストであるクラウス・ペーター・ケッピング (Klaus-Peter Koepping) は、フィールドワークという方法を「体験の官能性」と呼んだ [1987]。フィールドワーク／参与観察という方法は、具体的かつ生き生きとした記述、生きられた「日常」への接近を約束する。日常への接近については、たしかに学術的ではあるが、その重要性については議論の余地がないわけではない。しかし、今となっては、世紀の変わり目以来、社会的、メディア的、同様に芸術的にも、日常というコンセプトをめぐる問いは高まりをみせている。フィールドワーク／参与観察は、文化的・社会的現実への豊かで生き生きとしたパースペクティブを持ち、実存的で力強い体験によって特徴づけられる。それゆえ、エスノグラフィは、表象実践としても方法としても、感覚的体験と直接性の美学 ([Lindner 2006] 参照) への社会的要請に応えることができる。このような動向は、学際的かつ国際的傾向でもある。

民俗学／ヨーロッパエスノロジーにおけるエスノグラフィックな方法は、参与観察による現代研究のみに制限されないという理解が必要であると、近年は議論されている<sup>原注 25)</sup>。すなわち、過去の時代へも「接近」して「フィールド分析」を行なうことができる。その際は、様々なタイプの資料を用いながら、社会的・文化的、伝記的な生活事実の関連への理解が試みられる。このような理解を支持し得るならば、フィールドワークにおいて、包括的かつ追体験的に人びとの体験的次元に迫ろうとするアプローチは、まさしく「文化分析の特質」であるといえるかもしれない [Lindner 2003: 183]。そのようなフィールドワークの方法の歴史的研究への拡張は、方法論的かつ認識論的な問いを投げかける。その

諸問題をめぐる議論は、今なお端緒についたばかりであり、今後、深められていく余地があろう。歴史分析にとっての「体験」概念の反省をめぐる議論はそうした諸問題の一例である（[Münch 2001] ならびに [Göttsch 2006] 参照）。しかし、断言しよう。民俗学／ヨーロッパエスノロジーが、生きられた日常とアクターの社会的実践を重視する体験科学（Erfahrungswissenschaft）としての自己理解をもつかぎり、フィールドワークとそこで行なわれる参与観察が、その方法的レパートリーの中で優先的な位置を占めることは疑い得ないのである。

#### 原注

- 1) 例えば、ロルフ・ヴィルヘルム・ブレドニヒ (Rolf Wilhelm Brednich) は「データの収集」、そしてインフォーマント原則、インタビュー、観察などのカテゴリがフィールドワークに属すると強調しながら [Brednich 2001: 88]、フィールドワークそれ自体が具体的にどのようなものであるのかを明らかにしておらず、こうしたところから「民俗学的フィールドワーク」という概念への疑問が発生する。ここで不確かなままにされているのは、単独のインタビューをすでにフィールドワークとして呼び得るのか否かという問題である。
- 2) 研究者の中には、とりわけアルフレッド・シュッツ (Alfred Schütz) を参照しつつ、観察という方法を参加の程度（参加／反応的 - 不参加／低反応的）およびその体系性（体系的 - 非体系的）に応じて区別する者がある（[Merkens 1989: 14, Beer 2003a: 121] 参照）。通常、異なる参加の形式は研究実践の中で並用され、かつ相互にスムーズに移行するものである。いずれにせよ、体系的な観察方法をそれぞれ区別しながら説明するのは有意義である。
- 3) 「開放的な」参与観察は「秘密裏に行われる」参与観察から区別されることもある。しかし、後者は倫理的見地および法的見地から問題ぶくみであり、今日ではあまり使用されなくなっている。
- 4) 解釈学は、本来、テキストの意味を解釈する手法であったが（[Gadamer 1975] を参照）、エスノロジーにおいては、社会的行為の意味理解的解釈にまで敷衍されている。
- 5) 現象学的な現実把握、あるいは、行動や解釈の型、知識の社会的構成とシンボル化の再構成については、バーガー／ルックマン [1980] とセッファー [1989] を参照されたい。
- 6) フィールドワークがなぜ「フィールド」ワークというかについては、自然科学とのかつての緊密な結びつきが、概念形成史的な背景となっている。
- 7) 聴取した内容を相手に気付かれぬように記録化したい場合、ヴォシンドロ



は水洗い可能なゴム製のゲートルの着用をすすめていた。つまり、ゲートルにこっそりメモをとることで、容易に、かつ気付かれぬままに情報を書き残すことができるのだという。

- 8) 1970年代に発生した一流の科学としての社会学による方向づけ、あるいは、それに続くエスノロジーによる特徴づけという流れは、民俗学／ヨーロッパエスノロジーの学史のみの問題ではない。むしろ、文化学的・人文的ディシプリン全体の現象である。すなわち、これは1980年代以来の文化学全体における「人類学的転回」の話題なのである（例えば、[Bachmann-Medick 1992, 2004]を参照）。
- 9) この方向性は、例えば、学史のなかで重要論点を推移させてきた語り研究に明らかである。語り研究では、当初の語られた内容やその構成要素そのものへの関心から、語り手や、出来事としての語りの意味およびそのプロセス、そしてパフォーマンスをめぐる問いへと主要な論点に変化してきた。
- 10) フィールドワークという方法的アプローチは、今日の大学における民俗学／ヨーロッパエスノロジー教育の必修課題となっている。学生たちは、多くの場合、それをふまえた簡単な研究プロジェクトに取り組むことになる（ハンブルク大学民俗学・文化人類学研究所のホームページには、これについての多数の事例が記載されている）。当然、バachelor課程においては、方法的な基礎的モジュールが設けられている。
- 11) したがって、参与観察というアプローチが閉ざされる現実の領域も存在する。例えば、居心地の良さといったような精神状態は、わかりやすく表出することはないし、あらかじめ、特定の状況に規定されている。
- 12) 拙稿「質的インタビュー、あるいは対話の技能」を参照されたい [Schmidt-Lauber 2007]。
- 13) イレーネ・ゲッツ (Irene Götz) は、ミュンヘンのパン工場での研究の中で、研究者の役割として「宮廷道化師 (Hofnarr)」という概念を提案した。ゲッツによれば、そこには（「くだらない」）質問をしたり、関係を批判したり、異なるいくつかの役割を振る舞うことが許容されている部外者という含意がある [Götz 1997: 54f.]。
- 14) フィールドの人びとは、研究者にとって単なる友達ではない（あるいは、明確なシンパシーの持ち主でもない）。調査対象集団の成員として、いわば他者のリアリティの仲介者としての役割を果たす。結局のところ、文化学の興味は、個人心理学（いわゆる「アドラー心理学」）や精神分析とは相違して、個人的アイデンティティには向けられない。そうではなく、文化の成員としての、あるいは、文化的アクターとしての人間を注視するのである。
- 15) 精神分析に特化した方向性として「民族心理分析 (Ethnopschoanalyse)」

が展開された（例えば、フリッツ・モルゲンターラ (Fritz Morgenthaler)、マヤ・ナーディグ (Maya Nadig)、パウル・パーリン (Paul Parin) らを中心とするチューリッヒの民族心理分析の研究グループが存在する ([Reichmayr 1995] 参照)。民族心理分析は認識獲得の起点として、フィールドデータそのものではなく、研究者の主観性を重視する。すなわち、研究者が異国の人びとと出会い、異なる社会・文化のもとで生活世界にアプローチした際に発生する、苛立ちや恐怖、不安といった反応を、分析対象としている。

- 16) レギーナ・ベンディクス (Regina Bendix) はフィールドを感覚的に知覚すること、そして、自分自身の身体的体験にさらに注意を向けることを要求している。
- 17) これについては、エスノロジストであり精神分析家であるブレーメン大学のマヤ・ナーディグの議論を参照されたい。
- 18) これらについては、資料および方法に関する、アルブレヒト・レーマン (Albrecht Lehmann)、シルケ・ゲッチュ (Silke Göttsch) の編集による『民俗学の方法 (*Methoden der Volkskunde*)』[Lehmann/Göttsch 2006] を参照されたい。それらはフィールドワークという主題の枠内で応用可能である。
- 19) 厚い記述は、記述と解説の複合である。すなわち、一事例の精密な描写によって、意識的・無意識的な文化的知識を明らかにし、それとともに、社会的出来事をめぐる文化に型押しをする意味世界を客観化する方法である。
- 20) コミュニカティブな検証は、解釈の妥当性をインフォーマントとの会話の中で質問によって検証することを意味するが、この方法に対しては、(正当な) 反論があがった。その批判の出発点は、とりわけ、そこにおいて見込まれた解釈者間 (研究者とインフォーマント) の平等性と、それぞれの関心や視点による被拘束性にあった。
- 21) これらの批判的立場からは、告白文学の著者は、対象フィールドについてよりも、彼自身の個人的感情についてより多くの情報を発信していると指摘されている。
- 22) 調査プロセスの再帰性を記述して成功した例としては、ポール・ラビノウ (Paul Rabinow) [1977] のモロッコにおけるフィールドワークの記述がある。
- 23) この間、フィールドワークの「フィールド」は、閉じた統一体であるよりは、分析的フレームの中で理解される無数の社会的関係・社会的プロセスとみなされている。
- 24) 例えば、ロルフ・リントナー (Rolf Lindner) は、都市研究の文脈では「エスノグラファーの復権」が生じていると記述している ([Lindner 2004:

203ff.]。また、[Welz 2005: 25] 参照)。

- 25) 2006年に、ミュンスター大学で行なわれたドイツ民俗学会の大会でリ  
オーバ・ケラー-ドレスドナー (Lioba Keller-Dresdner) が行なった口頭  
発表「課題およびパースペクティブとしての歴史性」を参照されたい。

## 訳注

- 1) 本稿はドイツ語圏の民俗学の概説書『民俗学の方法』(原題 *Methoden der Volkskunde* アルブレヒト・レーマン、シルケ・ゲッチュ編) 所収、ブリギッタ・シュミット-ラウバーの「Feldforschung - Kulturanalyse durch teilnehmende Beobachtung」の全訳である。同書の初版は2001年であるが、本翻訳は2007年の版に依拠している。初版刊行後すでに20年以上の歳月を経過し、また2007年版からも相当の年月が経過したことをふまえ、本稿のために著者シュミット-ラウバー氏から若干の補筆・修正をいただいている。近年、日本の民俗学は海外の民俗学との交流・協働に力をいれており、訳者らも日独の民俗学交流のため、相互の基礎的理解を深めるべく、ドイツ語圏民俗学の研究成果の邦訳と、日本民俗学のドイツ語圏への発信に取り組んでいる。本翻訳もまたその一環である。本稿の議論は、ドイツ語圏民俗学におけるフィールドワークの方法的位置づけを説くものであるが、民俗学の調査技法が社会学・人類学など隣接分野の議論をふまえながらどのように構想されているかを知る上で、適切な文献と言えるであろう。なお、原著者のブリギッタ・シュミット-ラウバー氏は1965年、ドイツ北部のキールに生まれ、ハンブルク大学にて学び、同大学で教授資格を獲得している。2006年から2009年までゲッティンゲン大学文化人類学・ヨーロッパエスノロジー研究所で教授を務めてのち、2009年からはウィーン大学のヨーロッパエスノロジー研究所所長を務め、現在に至る。また、ウィーン民俗研究会 (Verein für Volkskunde) の副会長や、ドイツ民俗学会の中央委員会の委員に大学で教授職を務める研究者の代表として選出されるなど、ドイツ語圏の民俗学界の第一線で活躍している。研究の重点は人類学的フィールドワークと歴史論的な文化分析であるが、伝記研究と語り研究にも着手している。方法論的な問題に加えて、田舎と都市空間の社会的変遷プロセスや広義における都市研究を行っており、現在は、近年の気候変動対策を求める環境運動などの社会的課題に興味をもっている。
- 2) ラバート・エズラ・パークの文章については、シュミット-ラウバー氏と相談の上、英語原典からの翻訳を行なった。
- 3) ドイツ語圏の民俗学 (Volkskunde) は、第二次世界大戦後の改革を経て、各大学が様々な学問名称を選び取るようになってきている。ここでいうヨーロッパエスノロジー (Europäische Ethnologie) とは、ヨーロッパ領域の

民族学を意味するが、自文化研究の民俗学の系譜をひくものであり、異文化研究の民族学 (Völkerkunde) とは、境を接しつつも、同一の分野ではない。

- 4) ここでの訳語は増田義郎の翻訳を参照した。B・マリノフスキ 2010『西太平洋の遠洋航海者』(増田義郎訳) 講談社。
- 5) ここでの訳語は太田好信による翻訳を参照した。ジェームズ・クリフォード 2003『文化の窮状—20世紀の民族誌、文学、芸術』(太田好信・慶田勝彦・清水展・浜本満・古谷嘉章・星埜守之訳) 人文書院
- 6) シュミット-ラウバー氏からの私信によれば、スーパービジョンは、精神医学の用語であり、カウンセリング内容を第三者のカウンセラーにも検討してもらうことで、カウンセラーとクライアントの二者関係では気づき得ない知見を得ようとするものである。ここでのスーパービジョンは、フィールドの諸関係の中にある自分自身の位置を反省しようとする際、第三者に意見を求める方法である。

#### 参考文献

- Abu-Lughod, Lila. „Writing against Culture.“ In *Recapturing Anthropology. Working in the Present*, herausgegeben von Richard G. Fox, 137–62. Santa Fe, 1991.
- Appadurai, Arjun. „Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy.“ *Public Culture* 1990, Nr. 2 (1990): 1-24. (アパデュライ、アルジュン 2002 「グローバル文化経済における乖離構造と差異」(門田健一訳)『思想』933)
- . „Grassroots Globalization and the Research Imagination.“ *Public Culture: Alternative Globalization, Capitalism, Cosmopolitanism* 2000 12, Nr. 1: 1-19. (アパデュライ、アルジュン 2004 「草の根グローバル化と研究イマジネーション」(大谷裕文訳)『西南学院大学国際文化論集』18巻2号)
- Bachman-Medick, Doris, Hrsg. *Kultur als Text. Die anthropologische Wende in der Literaturwissenschaft*. 2. Auflage. Tübingen / Basel, 2004.
- . „Writing-Culture' - ein Diskurs zwischen Ethnologie und Literaturwissenschaft.“ *kea* 4 (1992): 1-20.
- Bachmann, Götz. „Teilnehmende Beobachtung.“ In *Methoden der Organisationsforschung. Ein Handbuch*, herausgegeben von Stefan Kühl und Strodtholz, 323-60. Reinbek, 2002.
- Ballhaus, Edmund, und Beate Engelbrecht, Hrsg. *Der ethnographische Film. Eine Einführung in Methoden und Praxis*. Berlin, 1995.
- Bausinger, Hermann. „Neue Felder, neue Aufgaben, neue Methoden.“ In *Deutsche Volkskunde - französische Ethnologie. Zwei Standortbestimmungen*, herausgegeben von Isac Chiva und Utz Jeggle, 326-44. Frankfurt a. M. /

- New York, 1987.
- Becker, Franziska. *Ankommen in Deutschland. Einwanderungspolitik als biographische Erfahrung im Migrationsprozeß russischer Juden*. Berlin, 2001.
- Beer, Bettina, Hrsg. *Methoden und Techniken der Feldforschung*. Berlin, 2003.
- . „Systematische Beobachtung.“ In *Methoden und Techniken der Feldforschung*, herausgegeben von Bettina Beer, 119–41. Berlin, 2003.
- Bendix, Regina. „Was über das Auge hinaus geht: Zur Rolle der Sinne in der ethnographischen Forschung.“ *Schweizer Archiv für Volkskunde*, n.d.
- Berg, Eberhard, und Martin Fuchs, Hrsg. *Kultur, soziale Praxis, Text. Die Krise der ethnographischen Repräsentation*. Frankfurt a. M., 1993.
- Berger, Peter L., und Thomas Luckmann. *Die gesellschaftliche Konstruktion der Wirklichkeit. Eine Theorie der Wissenssoziologie*. Frankfurt a. M., 1980. (バーガー、ピーター・L／ルックマン、トーマス 2003 『現実の社会的構成－知識社会学論考』(山口節郎訳) 新曜社)
- Bernard, H. Russel, Hrsg. *Handbook of Methods in Cultural Anthropology*. Walnut Creek, 2000.
- . *Research Methods in Anthropology: Qualitative and Quantitative Approaches*. Walnut Creek, 1995.
- Bourdieu, Pierre. „Narzißtische Reflexivität und wissenschaftliche Reflexivität.“ In *Kultur, soziale Praxis, Text. Die Krise der ethnographischen Repräsentation*, herausgegeben von Eberhard Berg und Martin Fuchs, 365–74. Frankfurt a. M., 1993.
- Brednich, Rolf Wilhelm. „Quellen und Methoden.“ In *Grundriß der Volkskunde. Einführung in die Forschungsfelder der Europäischen Ethnologie*, herausgegeben von Rolf Wilhelm Brednich, 3. überarbeitete und erweiterte Auflage., 77–100. Berlin, 2001.
- Burawoy, Michael, Hrsg. *Global Ethnography. Forces, Connections and Imaginations in a Postmodern World*. Berkeley/Los Angeles/London, 2000.
- Clifford, James. „Über ethnographische Autorität.“ In *Kultur, soziale Praxis, Text. Die Krise der ethnographischen Repräsentation*, herausgegeben von Eberhard Berg und Martin Fuchs, 109–57. Frankfurt a. M., 1993. (クリフォード、ジェイムズ 2003 「民族誌の権威について」『文化の窮状—20世紀の民族誌、文学、芸術』(太田好信・慶田勝彦・清水展・浜本満・古谷嘉章・星埜守之訳) 人文書院)
- Clifford, James, und George E. Marcus, Hrsg. *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley, 1986. (クリフォード、ジェイムズ／マーカス、ジョージ 1996 『文化を書く』(春日直樹・和邇悦子・足羽羽志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子訳) 紀伊國屋書店)

- Dammann, Rüdiger. *Die dialogische Praxis der Feldforschung. Der ethnographische Blick als Paradigma der Erkenntnisgewinnung*. Frankfurt a. M./New York, 1991.
- Davies, Charlotte Aull. *Reflexive Ethnography: A Guide to Researching Selves and Others*. London, 1999.
- Dégh, Linda. *Märchen, Erzähler und Erzählgemeinschaft*. Berlin, 1962.
- Deißner, Vera. *Die Volkskunde und ihre Methoden. Perspektiven auf die Geschichte einer „tastend-schreitenden Wissenschaft“ bis 1945*. Studien zur Volkskultur in Rheinland-Pfalz 21. Mainz, 1997.
- De Munck, Victor, und Elisa J. Sobos, Hrsg. „Using Methods in the Field: A Practical Introduction and Casebook.“ Walnut Creek, 1998.
- Devereux, Georges. *Ethnopschoanalyse. Die komplementaristische Methode in den Wissenschaften vom Menschen*. Frankfurt a. M., 1978.
- Dewalt, Kathleen M., und Billie R. Dewalt. *Participant Observation: A Guide for Fieldworkers*. Walnut Creek, 2002.
- Eisch, Katharina, und Marion Hamm, Hrsg. *Die Poesie des Feldes. Beiträge zur ethnographischen Kulturanalyse*. Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen 93. Tübingen, 2001.
- Fabian, Johannes. „Präsenz und Repräsentation, Die Anderen und das anthropologische Schreiben.“ In *Kultur, soziale Praxis, Text. Die Krise der ethnographischen Repräsentation*, herausgegeben von Eberhard Berg und Fuchs, Martin. Frankfurt a. M., 1993.
- Fischer, Hans, Hrsg. *Feldforschungen. Berichte zur Einführung in Probleme und Methoden*. Berlin, 1985.
- Flick, Uwe. *Qualitative Forschung. Theorie, Methoden, Anwendung in Psychologie und Sozialwissenschaften*. 2. Auflage. Reinbek bei Hamburg, 1996.
- Freeman, Derek. *Margaret Mead and Samoa. The Making and Unmaking of an Anthropological Myth*. Cambridge, 1983. (フリーマン、デレク 1995 『マーガレット・ミードとサモア』(木村洋二訳) みすず書房)
- Fuchs, Martin, und Eberhard Berg. „Phänomenologie der Differenz. Reflexionsstufen ethnographischer Repräsentation.“ In *Kultur, soziale Praxis, Text. Die Krise der ethnographischen Repräsentation*, herausgegeben von Eberhard Berg und Martin Fuchs, 11-108. Frankfurt a. M., 1993.
- Gadamer, Hans-Georg. *Wahrheit und Methode. Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*. 4. Auflage. Tübingen, 1975. (ガダマー、ハンス・ゲオルク 2012 『真理と方法』 I 〈新装版〉(饗田収・大石紀一郎・麻生建・三島憲一・北川東子・我田広之訳) 法政大学出版局。同 2015 『真理と方法』 II 〈新装版〉(饗田収・卷田悦郎訳) 法政大学出版局。同 2012 『真理と方法』

- Ⅲ (轡田収・三浦國泰・卷田悦郎訳) 法政大学出版局)
- Geertz, Clifford. *Dichte Beschreibung. Beiträge zum Verstehen kultureller Systeme*. Frankfurt a. M., 1987. (ギアーツ、クリフォード 1987 「厚い記述」『文化の解釈学Ⅰ』(吉田禎吾・中牧弘允・柳川啓一・板橋作美訳) 岩波書店)
- . *Die künstlichen Wilden. Der Anthropologe als Schriftsteller*. Wien, 1990.
- Girtler, Roland. *Methoden der Feldforschung*. 4., völlig neu bearbeitete Auflage. Wien/Köln/Weimar, 2001.
- Glaser, Barney G., und Anselm L. Strauss. *The Discovery of Grounded Theory: Strategies of Qualitative Research*. Chicago, 1967. (グレイザー、バーニー／アンセルム、L・ストラウス 1966 『データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか』(後藤隆・大出春江・水野節夫訳) 新曜社)
- Gottwik, Volker. *Konstruktionen des Anderen. Clifford Geertz und die Krise der ethnographischen Repräsentation*. Berlin, 1997.
- Götz, Irene. *Unternehmenskultur. Die Arbeitswelt einer Großbäckerei aus kulturwissenschaftlicher Sicht*. Münchner Beiträge zur Volkskunde 19. München, 1997.
- Greverus, Ina-Maria. *Die Anderen und Ich. Vom Sich Erkennen, Erkennt- und Anerkanntwerden. Kulturanthropologische Texte*. Darmstadt, 1995.
- Gyr, Ueli. „Kulturale Alltäglichkeit in gesellschaftlichen Mikrobereichen. Standpunkte und Elemente zur Konsensdebatte.“ In *Zwischen den Stühlen fest im Sattel? Eine Diskussion um Zentrum, Perspektiven und Verbindungen des Faches Volkskunde. Hochschultagung der deutschen Gesellschaft für Volkskunde Basel, 31. Oktober – 2. November 1996*, herausgegeben von Christine Burckhardt-Seebass, 13–19. Göttingen, 1997.
- Hannerz, Ulf. „'Kultur' in einer vernetzten Welt. Zur Revision eines ethnologischen Begriffes.“ In *Kulturen – Identitäten – Diskurse. Perspektiven europäischer Ethnologie*, herausgegeben von Wolfgang Kaschuba, 64–84. Berlin, 1995.
- Hauser-Schäublin, Brigitta. „Teilnehmende Beobachtung.“ In *Methoden und Techniken der Feldforschung*, herausgegeben von Bettina Beer, 33–54. Berlin, 2003.
- Hug, Theo. *Diskursive Feldforschung. Methodologie und Empirie am Beispiel hochschuldidaktischer Projektarbeiten*. Impulse 8. Wien, 1996.
- Ilien, Albert, und Utz Jeggle. *Leben auf dem Dorf. Zur Sozialgeschichte des Dorfes und zur Sozialpsychologie seiner Bewohner*. Opladen, 1978.
- Jeggle, Utz, Hrsg. *Feldforschung. Qualitative Methoden der Kulturanalyse*. 2. Auflage. Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen 62. Tübingen, 1984.



- . „Zur Geschichte der Feldforschung in der Volkskunde.“ In *Feldforschung. Qualitative Methoden der Kulturanalyse*, herausgegeben von Utz Jeggle, 11-54. Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen 62. Tübingen, 1984.
- Kaase, Max, Hrsg. *Qualitätskriterien der Umfrageforschung: Denkschrift. Quality criteria for survey research: memorandum*. Berlin: Deutsche Forschungsgemeinschaft, 1999.
- Kea-Zeitschrift für Kulturwissenschaften, Heft 4: *Writing Culture* 1992.
- Koeping, Klaus-Peter. „Authentizität als Selbstfindung durch den anderen: Ethnologie zwischen Engagement und Reflexion, zwischen Leben und Wissenschaft.“ In *Authentizität und Betrug in der Ethnologie*, herausgegeben von Hans Peter Duerr, 7-37. Frankfurt a. M., 1987.
- Kohl, Karl-Heinz. *Exotik als Beruf. Erfahrung und Trauma der Ethnographie*. Frankfurt a. M./New York, 1986.
- Kühl, Stefan, und Petra Strodtholz, Hrsg. *Methoden der Organisationsforschung. Ein Handbuch*. Reinbek bei Hamburg, 2002.
- Legewie, Heiner. „Feldforschung und teilnehmende Beobachtung.“ In *Handbuch qualitative Sozialforschung*, herausgegeben von Flick, Uwe, 2. Auflage, 189-92. Weinheim, 1995.
- Lehmann, Albrecht. *Das Leben in einem Arbeiterdorf. Eine empirische Untersuchung über die Lebensverhältnisse von Arbeitern*. Göttinger Abhandlungen zur Soziologie 23. Stuttgart, 1976.
- Lehmann, Albrecht, und Silke Göttisch, Hrsg. *Methoden der Volkskunde-Positionen, Quellen, Arbeitsweisen der Europäischen Ethnologie. 2.*, Überarbeitete und erweiterte Auflage. Berlin: Reimer, 2007.
- Lewis, Oscar. *Tepotzlán: Village in Mexico*. New York, 1960.
- Lindner, Rolf. „Die Angst des Forschers vor dem Feld. Überlegungen zur teilnehmenden Beobachtung als Interaktionsprozeß.“ *Zeitschrift für Volkskunde* 77 (1981): 51-66.
- . „Ohne Gewähr. Zur Kulturanalyse des Informanten.“ In *Feldforschung. Qualitative Methoden der Kulturanalyse*, herausgegeben von Utz Jeggle, 2. Auflage, 59-80. Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen 62. Tübingen, 1984.
- . „Vom Wesen der Kulturanalyse.“ *Zeitschrift für Volkskunde*, Nr. 99 (2003): 177-88.
- . *Walks on the Wild Side*. Frankfurt a. M.: Campus, 2004.
- Malinowski, Bronislaw. *Argonauten des westlichen Pazifik. Ein Bericht über Unternehmungen und Abenteuer der Eingeborenen in den Inselwelten von*

- Melanesisch-Neuguinea. Mit einem Vorwort von James G. Frazer.* Frankfurt a. M., 1984. (マリノフスキ、プロニスワフ 2010 『西太平洋の遠洋航海者』(増田義郎訳) 講談社)
- . *Ein Tagebuch im strikten Sinn des Wortes. Neuguinea 1914-1918.* Frankfurt a. M., 1985. (マリノフスキー、プロニスラフ 1987 『マリノフスキー日記』(谷口佳子訳) 平凡社)
- Marcus, George E. „Ethnography in/of the World System: The Emergence of Multi-Sited Ethnography.“ *Annual Review of Anthropology* 24 (1995): 95-117.
- . *Ethnography through Thick and Thin.* Princeton, 1998.
- Marcus, George E., und Michael M. Fischer. *Anthropology as Cultural Critique. An Experimental Moment in the Human Sciences.* Chicago, 1986. (マークス、ジョージ・E / フィッシャー、マイケル・M 1989 『文化批判としての人類学—人間科学における実験的試み』(永渕康之訳) 紀伊国屋書店)
- Mead, Margaret. *Coming of Age in Samoa: A Study of Adolescence and Sex in Primitive Societies.* Harmondsworth, 1943. (ミード、マーガレット 1976 『サモアの思春期』(畑中幸子・山本真鳥訳) 蒼樹書房)
- Merkens, Hans. „Einleitung.“ In *Teilnehmende Beobachtung: Werkstattberichte und methodologische Reflexionen*, herausgegeben von Rainer Aster, 9-17. Frankfurt a. M., 1989.
- Metzger, Sabine. *Leben im neuen Dorf. Eine volkskundliche Untersuchung zu Dorfsiedlungen im Rheinischen Braunkohlerevier am Beispiel Neu-Etzeiler.* Studien zur Alltagskulturforchung 2. Münster, 2004.
- Moser, Hans. „Vom Folklorismus in unserer Zeit.“ *Zeitschrift für Volkskunde* 58 (1962): 177-209.
- Münch, Paul, Hrsg. „Erfahrung“ als Kategorie der Frühneuzeitgeschichte. *Konferenz der „Arbeitsgemeinschaft Frühe Neuzeit“ im Deutschen Historikerverband, Essen, 16.-18. September 1999.* Oldenburg, 2001.
- Obrecht, Sibylle. „Protokoll einer Inselexpedition oder: Wie ortlos ist eine Autobahnraststätte.“ In *Technik-Kultur. Formen der Veralltäglicung von Technik - Technisches als Alltag*, herausgegeben von Thomas Hengartner und Johanna Rolshoven, 83-103. Zürich, 1998.
- Overdick, Thomas. „Ethnofotografie. Versuch einer Repositionierung volkskundlicher Fotografie.“ In *Fotografien vom Alltag - Fotografieren als Alltag*, herausgegeben von Irene Ziehe und Ulrich Hägele, 17-26. Münster, 2004.
- Rabinow, Paul. *Reflections on Fieldwork in Morocco.* Berkeley/Los Angeles/London, 1977.
- Redfield, Robert. *Tepoztlán, a Mexican Village: A Study of Folk Life.* 5. Auflage,

- 1949.
- Reichmayr, Johannes. *Einführung in die Ethnopschoanalyse. Geschichte, Theorien und Methoden*. Frankfurt a. M., 1995.
- Riehl, Wilhelm Heinrich. „Handwerksgeheimnisse des Volksstudiums.“ In *Wanderbuch*, herausgegeben von Wilhelm Heinrich Riehl, 3-31. Stuttgart, 1869.
- Russel, Bernard H., Hrsg. *Handbook of Methods in Cultural Anthropology*. Walnut Creek, 1998.
- . *Research Methods in Anthropology: Qualitative and Quantitative Approaches*. Walnut Creek, 1995.
- Schmidt-Lauber, Brigitta. „Die verkehrte Hautfarbe“. *Ethnizität deutscher Namibier als Alltagspraxis*. Lebensformen 10. Berlin/Hamburg, 1998.
- , Hrsg. *FC St. Pauli. Zur Ethnographie eines Vereins*, 2. aktualisierte, überarbeitete und erweiterte Auflage. Studien zur Alltagskulturforschung 4. Münster, 2004.
- . „Das qualitative Interview oder: Die Kunst des Reden-Lassens“. In *Methoden der Volkskunde – Positionen, Quellen, Arbeitsweisen der Europäischen Ethnologie*, herausgegeben von Albrecht Lehmann und Silke Göttisch, 2., überarbeitete und erweiterte Auflage, 169-88. Berlin: Reimer, 2007. (シユミット-ラウバー、ブリギッタ 2016 「質的インタビュー、あるいは対話の技能」(及川祥平/ゲーラット、クリスチャン訳) 『日常と文化』 2)
- Shostak, Marjorie. *Nisa erzählt. Das Leben einer Nomadenfrau in Afrika*. Reinbek bei Hamburg, 1987. (シヨスタック、マージョリー 1994 『ニサー-カラハリの女の物語り』(麻生九美訳) リプロボート)
- Smith Bowen, Eleonore. *Rückkehr zum Lachen. Ein ethnologischer Roman*. Berlin, 1987.
- Soeffner, Hans-Georg. *Auslegung des Alltags – Der Alltag der Auslegung. Zur wissenssoziologischen Konzeption einer sozialwissenschaftlichen Hermeneutik*. Frankfurt a. M., 1989.
- Spradley, James. *Participant Observation*. Fort Worth u.a., 1980.
- Stagl, Justin. „Feldforschung als Ideologie.“ In *Feldforschungen. Berichte zur Einführung in Probleme und Methoden*, herausgegeben von Hans Fischer, 289-310. Berlin, 1995.
- Stanton, Gareth. „Writing Culture in the 21st Century.“ *European Journal of Cultural Studies* 7, Nr. 2 (1994): 155-65.
- Warneken, Bernd Jürgen, und Andreas Wittel. „Die neue Angst vor dem Feld. Ethnographisches Research up am Beispiel der Unternehmensforschung.“ *Zeitschrift für Volkskunde* 93 (1997): 1-16.

- Weingarten, Elmar, Fritz Sack, und Jim Schenkein, Hrsg. *Ethnomethodologie. Beiträge zu einer Soziologie des Alltagshandelns*. Frankfurt a. M., 1991.
- Welz, Gisela. „Ethnografien europäischer Modernen.“ In *Ort. Arbeit. Körper. Ethnografie europäischer Modernen. 34. Kongress der Deutschen Gesellschaft für Volkskunde, Berlin 2003*, herausgegeben von Beate Binder, 19–32. Schriftenreihe Museum Europäischer Kulturen 3. Münster u.a., 2005.
- . „Moving Targets. Feldforschung unter Mobilitätsdruck.“ *Zeitschrift für Volkskunde* 94 (1998): 177–94.
- . *StreetLife: Alltag in einem New Yorker Slum*. Kulturanthropologie-Notizen 36. Frankfurt a. M., 1991.
- White, Hayden. *Die Bedeutung der Form. Erzählstrukturen in der Geschichtsschreibung*. Frankfurt a. M., 1990.
- Whyte, William. *Die Street Corner Society: Die Sozialstruktur eines Italienviertels. Nach der 3. durchgesehene und erweiterte Auflage aus dem Jahr 1981. Mit einer Einführung von Peter Atteslander*. Berlin/New York, 1996. (ホワイテ、W・F 1974 『ストリート・コーナー・ソサイエティー—アメリカ社会の小集団研究』(寺谷弘壬訳) 垣内出版)
- Wossidlo, Richard. „Über die Technik des Sammelns volkstümlicher Überlieferung.“ *Zeitschrift für Volkskunde* 11 (1906): 1–24.
- Ziegler, Meinrad. „Grundragen der Ethnographie.“ In *Wie kommt Wissenschaft zu Wissen? Bd. 3: Einführung in die Methodologie der Sozial- und Kulturwissenschaften*, herausgegeben von Theo Hug, 138–51. Baltmannsweiler, 2001.